

スイートピー栽培法についての研修報告

富 永 輝
(農学部附属農場)

研修目的

現在、学内圃場では花卉実習としてスイートピーの栽培を学生実習で取り組んでいるが、その栽培・管理法については、不十分な点が多い。学生への良質な教育提供と共に、生産量・品質の高度化を目指すためにも、栽培技術の向上は不可欠であると考え、本研修を実施することにした。鹿児島県は、スイートピーの栽培に関してあまり盛んに行われていないこともあり、隣県で生産量・生産農家数も多い宮崎県で、その中でも栽培試験の研究及び普及に力を入れている宮崎県総合農業試験場を今回の研修先に決め、2010年2月1日に来場した。

研修報告

今回視察したスイートピー栽培施設は、単棟のガラス温室(間口5m、約100㎡)5棟程で、その圃場で実物を見学しながら、栽培・管理法について説明を頂いた。またその他に、収穫後の調整施設を見学し、切り花の鮮度保持や調整方法等について同様に説明を頂いた。以下に、その内容を記す。

*** 作型：**良品の花が連続的に出荷できる冬春出荷(冬咲き・春咲き系)型を基本としていた。

また電照の必要な夏咲き系については、種子春化のための冷蔵処理の日数がかかる、収穫期の切り花単価が安いという理由から、現在栽培試験は行っていないとのことだった。

*** 品種：**白系・ピンク系・紫系の品種の他、県試独自で育成した品種も栽培していた(写真1,2,3)。

*** 育苗：**種子は、外部から購入すると、発芽や開花後の花色のばらつきが見られるとの事で、自家採種した種を使用していた。採種は、4月初旬から始めた場合(それまでは随時採花する)、約50~60日後の5月中旬~6月初旬には、種を収穫できるとのことだった。播種前に催芽処理として濃硫酸処理を行い、種子春化させるためにその後冷蔵処理を0~2℃で20~40日行うとのことだった。

* 栽培

1) 施肥：冬・春咲き系では基肥を控えめにし、状態により適宜液肥を投与するが、過剰に与えると吸水に影響を及ぼし逆効果になるとのことであった。

2) 定植：定植時の地温低下を図る目的で、多孔のある白黒マルチを全面被覆していた。栽植距離は、畦間135cm、畦幅85cm、条間35cm、株間12cmで、4ベッド2条植えとしていた。

3) 栽培管理：着花母枝は1株1本立てとしていた。生育に合わせてその後、整枝・誘引を行うが、その誘引の方法が特に印象に残った。蔓を垂直方向に誘引するネットに加え、下部に蔓受け用のネットを張り、地面に直に接しない様にしていた。誘引は、蔓下げを横同方向にしていき、ネット端まできたら裏のネットに回し同様に誘引していた。見た目もキレイにコンパクトにまとめられている印象を受けた(写真4,5)。水管理は、栽培者によってやり方は変わってくるそうだが、基本的に灌水は控えめに、あとは草勢と天候を見ながら調整していくとのことだった。試験場では、マルチ下に灌水チューブを張り、液肥もそこから投与していた。温度管理は、5~20℃を適温とし、高温になると開花は早くなるが草勢が低下し、花のボリュームの低下につながるとのことだった。

*** 病虫害防除：**病害には、うどんこ病、灰色かび病が特に発生しやすいとのこと、摘葉などの草勢管理、

予防薬剤散布といった対策を講じる必要があるとのことだった。視察した圃場でも一部の株で灰色カビ病が発生していた。

*鮮度保持：採花後、すぐに鮮度保持剤（STS剤：チオ硫酸銀）に1～2時間程漬け、一晩水揚げを行っていた（写真6）。品種によっては一ヶ月以上花持ちするものもあるとのことだった。STS剤は、他にもトルコギキョウ、キクといった切り花類にも使用できるので、常備しておく必要があるように感じた。

感想

今回の研修を通して、特に誘引方法についてはたいへん勉強になり、是非、学内農場でも取り入れていきたいと感じた。その他、ここでは挙げてないが、細かな管理作業法等学ぶべきところが多い充実した研修であった。時間はかかると思うが、本研修で学んだことを今後生かし、更なる栽培技術の向上を図っていきたいと思う。

最後に、急なお願いにも関わらず研修を受け入れて下さった宮崎県総合農業試験場 花卉部 中村様にお礼を申し上げたいと思います。

写真1



写真4



写真2



写真5



写真3



写真6

